

瀬戸、尾張旭、長久手の三市町でつくる尾張東部衛生組合が、〇二年二月の完成をめどに瀬戸市北丘町で建設を進めている一般廃棄物最終処分場が、全容を現してきた。組合にとって初の管理型となる同処分場は、来春以降十五年間にわたって、三市町から出されるごみの焼却灰などを埋め立てる計画。九日、完成前の現地を歩いてみた。

●天守閣7杯分

森に囲まれた瀬戸市北部の丘陵地。同処分場は、標高約二百三十メートルの高台に位置している。処分場の上方部分から見下ろすと、全体を遮水シートで覆われた巨大なくぼ地が広がっていた。

面積は二万一千平方メートル。最終的な埋め立て容量は二十万立方メートルになるという。名古屋城天守閣の、ざっと七杯分に相当する容量。

土木工事の進捗よく率は約85%。工事は今年いっぱいでは完了し、十二月以降は、水処理施設の試運転を続け、来年二月末に引き渡される運びだ。

●延命策

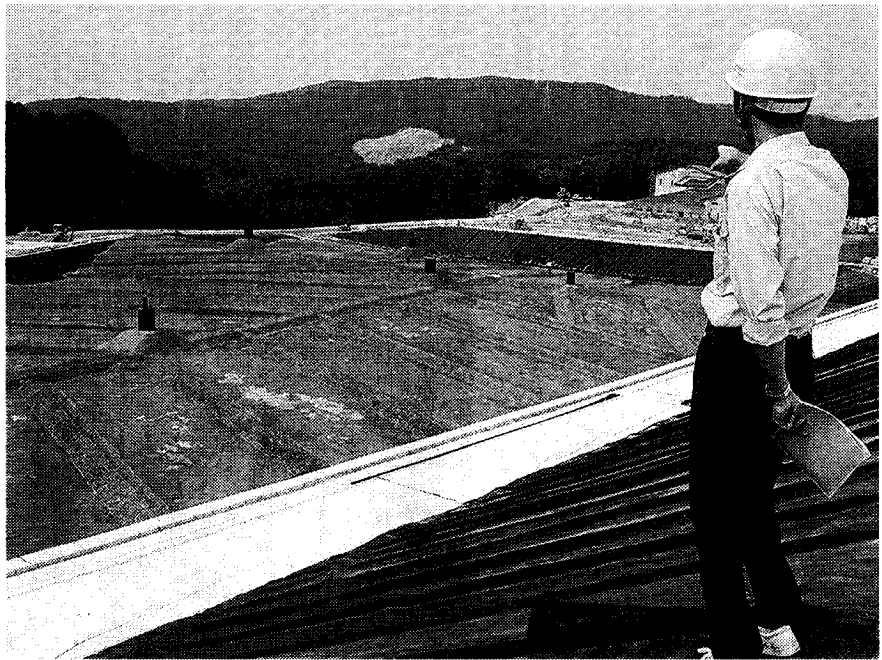
隣接の「北丘灰埋立地」が一昨年七月に満杯

瀬戸の最終処分場が全容

尾張東部衛生組合

浸出水を厳戒

遮水シートで覆われた尾張東部衛生組合の一般廃棄物最終処分場建設地＝瀬戸市北丘町で



初の管理型タイプ  
来春から15年使用

となつて以来、三市町の市の民間処分場の二カ所 八年程度は、ASECに焼却灰、ガラスや陶器、にだ。年間四千五百トの処理を

硬質プラスチックといっ 三市町で発生する焼却 可燃性の破砕かすにつ 灰、不燃性破砕かすは年 理することになるが、組 合は、新処分場稼働後も していた。